理事者室から

錯誤の中で

副会長　田島 正広（48 期）

主な担当業務：業務改革，活動領域拡大，若手会員支援，中小企業支援，司法改革，税務，法律相談，LAC，外国人の人権，公益通報者保護，選挙管理，市民会議，OA 関係

野中郁次郎他著「失敗の本質」に，次の言葉がある。「戦闘は錯誤の連続であり，より少なく誤りをおかしたほうにより好ましい帰結をもたらすといわれる」。戦史学者の言に由来する一節のはずだが，記憶が定かではない。この数か月を振り返って，この言葉を今改めてしみじみと思い起こしている。

歴史に目を向ければ，関ヶ原合戦では，敗者の石田三成は小早川秀秋らの去就を見誤ったが，勝者の徳川家康にも肝心の戦場に秀忠の徳川本隊が間に合わないという大誤算があった。西軍真田昌幸の知略による足止めのためだが，当時西からは西軍一の猛者立花宗茂が大津城を落とし関ヶ原に急行していた。一方北九州では，豊臣秀吉の軍師だった黒田官兵衛が，東軍とは名ばかりに近隣を席巻していた。時は今しかない。天下取りの代償は豊臣恩顧の大名への厚遇であり，徳川政権は，織田・豊臣の中央集権体制に比べて基盤の脆弱な地方分権の幕藩体制とならざるを得なかった。大坂の陣も大名への賦役や参勤交代も関ヶ原で負ったくびきであった。

昭和に目を転じれば，太平洋戦争の分岐点ミッドウェイ海戦は日本側にはまさに錯誤の連続だった。当初発見できなかった米空母発見の報を受け，南雲司令官は対地攻撃から対艦攻撃への兵装転換を命じたが，その作業中爆弾が満載の甲板に相手の急降下爆撃を受け歴戦の空母３隻を失ってしまう。

失意の南雲に代わり指揮を執った山口司令官は，相手の艦載機が帰路にある今こそ好機と１隻残った空母飛龍で逆襲する。米空母ヨークタウンを大破炎上，航行不能にさせて数時間。別海域で航行中の空母をさらに捕捉し，炎上傾斜させる。相手空母は残り１隻と判断し決戦を続行したが，しかし米国の技術力は日本の常識を超えていた。２隻目は緊急修理後航行を再開したヨークタウンだったのだ。まもなく飛龍を空母２隻分の艦載機が襲い，山口司令官は艦と運命を共にした。

さて，話題を今年度の当会に戻そう。新型コロナウイルスという見えない敵との闘いはどうだったか。３月中旬までは日本全国の一日の感染症感染者数が２桁台で推移したが，春の陽気が誘った解放感は３月下旬以降の急激な感染者数増加を招来した。時は折しも年度替わりの引継ぎ時。社会的に感染防止対策のあり方が必ずしも確立されないうちに，ウイルスは足元に忍び寄り，緊急事態宣言は眼前に迫っていた。費用を伴う職員のテレワークは計画すらない中，飛沫防止用のシート・アクリルボード等の機材購入も電話相談室の３密回避のための回線移設工事も，平時なら数日でできることが数週間待ちとなる異常事態に直面する。間に合わない。社会を襲った感染への恐怖心と対応への危機感は，社会経済活動に急ブレーキをかけ，政府の出勤７割減要請はこれに拍車をかけた。公共交通機関の利用も業務や委員会での接点も恐怖の対象となった。

こうして職員の出勤数減員は不可避となり，会としての機能が大幅に低下する中，それでも何を守るか，今すべきことは何かが問われることとなった。錯誤の中でも，確かな情報とIT技術，そして何より人の熱意と絆と信頼を支えに，縮小した戦線を懸命に守り抜く籠城戦がそこにはあった。